

# ロシアにおける「死生学」研究動向

松濤 芙紀

## 1. はじめに

近年のロシアで、人類学や社会学、歴史学の研究者を中心としてロシア初の「死生学」研究室が開設され、専門の学術雑誌が発行されている。

ロシアの「死生学」では、どのようなテーマが取り上げられているのだろうか。本稿では、学術雑誌の内容に注目すると共に、「死生学」プロジェクト開始の経緯に注目し、ロシアで「死生学」が必要とされた背景の理解を試みる。「死生学」の概要を掴むことによって、今ロシアで「死」に関連して何が課題とされているのか、知ることができると考えられる。

## 2. ロシアにおける「死生学」プロジェクト

日本において、日本語で入手できるロシアの「死生学」に関する情報は多くない。そもそも欧米や日本における「死生学」に該当するような学際的な分野が、ロシアにおいて成立しているのかについても明確な情報は少ないが、2017年10月11日付の「ロシア初『死の研究室』がオープン：テクノロジーがもたらす死生観の変化」という記事から、サンクトペテルブルクに「死の研究室」が開設されたという情報を得ることができる<sup>(1)</sup>。

### 2-1 「死の研究室」の概要

「死の研究室」<sup>(2)</sup>は、2017年にサンクトペテルブルク・独立社会学調査センター<sup>(3)</sup>のプロジェクトの一つとして立ち上げられており、研究室開設の2年前からは、ロシア初の「死生学」に関連する専門の学術雑誌『死の考古学』<sup>(4)</sup>が発行されている。当該雑誌の編集長であるS・モハフ<sup>(5)</sup>と編集委員の一人であるA・ソコロワ<sup>(6)</sup>の2名が研究室に所属しており、研究室の紹介文には、雑誌『死の考古学』を土台として研究室が生まれたと説明されている<sup>(7)</sup>。

「死の研究室」が開設された理由として、研究室のホームページに以下の内容が挙げられている。西欧では死に関するテーマ（緩和ケア・葬送産業・大衆文化における死など）に関心が集まっており、専門の学術雑誌や研究機関がある一方で、ロシアではこれらのテーマが一般的ではなく、死に焦点を当てた研究は、2つの分野に限定されていた。民衆の生活様式や儀礼を扱う民俗学・民族誌的研究と、宗教哲学の古典的なテーマとしての死の研究である。この2つの研究だけでは光を当てられていない分野が残っており、死を専門に扱う研究機関や雑誌を創設する必要性があったという<sup>(8)</sup>。

モハフは、英・マンチェスター大学で歴史学の修士号を取得しており、現在は、「葬送産業と社会秩序」というテーマで、ロシア国立研究大学高等学校の大学院で学んでいる。ソコロワは、人類学を専門としており、20 - 21世紀の葬儀の変容を研究している人物である。両者とも、歴史学・人類

学の立場から、葬儀に関連する研究を行なっている。また、『死の考古学』の編集には、両者の他に 3 名が参加しており、人類学、歴史学を専門としている<sup>(9)</sup>。

## 2-2 『死の考古学』の概要

続いて、ロシア初の死生学雑誌『死の考古学』の概要を紹介する。2015 年に第 1 巻が発行され、現在は最新刊である第 6 巻が販売されている（2019 年 3 月時点）<sup>(10)</sup>。発行部数は、各巻 700 - 900 部ほどであり、サンクトペテルブルクやモスクワなど数都市の書店で購入が可能である。書店での販売終了後に、オンラインでも公開され、無料で読むことができる。雑誌制作のための資金は、クラウドファンディングによって集められた。『死の考古学』というタイトルは、M・フーコーの『知の考古学』にちなんで、名付けられている<sup>(11)</sup>。

雑誌は、各巻ごとに以下のような個別テーマが掲げられている。

第 1 巻（2015 年）死生学研究の背景、現代ロシアの葬儀・墓地<sup>(12)</sup>

第 2 巻（2016 年）ソヴィエト連邦における死（Смерть в СССР）

第 3 巻（2016 年）自然発生的な追悼（Спонтанная мемориализация）

第 4 巻（2017 年）大衆文化における死（Смерть в популярной культуре）

第 5 巻（2017 年）火葬（Кремация）

第 6 巻（2018 年）死とテクノロジー（Смерть и технологии）<sup>(13)</sup>

第 1 巻の冒頭に、編集長のモハフと、アメリカの人類学者であり、雑誌編集委員の一人でもある S・カン<sup>(14)</sup>の対談が掲載されており、ロシアにおける「死生学」<sup>(15)</sup>の必要性和特徴について議論されている。ロシアの「死生学」の特徴として、①歴史学者・人類学者・社会学者が発起人であること、②アメリカでは、ホスピスなどの死にいたる過程に焦点が当てられているのに対し、ロシアでは墓地や葬儀式に関する研究は比較的豊富にあること、③20 世紀ソヴィエト時代における大量の死（戦争・革命・強制収容所・飢饉など）を巡る様々な問題があること、等が挙げられている<sup>(16)</sup>。

## 2-3 「死生学」プロジェクト開始以前

以上が「死生学」プロジェクトの概要であるが、2015 年の雑誌発行、2017 年の研究室開設にいたるまでには、どのような機運の高まりがあったのだろうか。

雑誌が発行される前年に、死生学に関連する会議が開催されている。2014 年 2 月、ロシア科学アカデミー人類学民族学研究所<sup>(17)</sup>において、「現代文化におけるサナトロジーの実践と語り：ソヴィエトおよびポスト・ソヴィエト時代」<sup>(18)</sup>というテーマで実施された。主催者は同研究所のソコロワと、A・ユードキナ（А. Юдкина）の 2 名である。モスクワやサンクトペテルブルクの他、キエフやサラトフ、アパチートウイの研究センターから、人類学・民族学者だけでなく、社会学や民俗学、民族言語学を専門とする研究者の参加があった<sup>(19)</sup>。

会議の目的は、「現代文化における葬儀、記念的实践、死に関する言説に興味を持ち学ぶ人のためのプラットフォームとなること」であり、17 の論題が議論されている<sup>(20)</sup>。『死の考古学』の編集委員でもある D・エルモリン<sup>(21)</sup>の報告によると、会議の趣旨は、ソヴィエト時代とポスト・ソヴィエ

ト時代に葬儀や死の語られ方がどのように変化したかを問い、さらに、この問題の経済的・社会的な側面に注目するというものである。ソヴィエト時代に、都市部と農村部の生活様式が大きく変わり、死と葬儀に関連した分野にも影響が及んだ。このような変化は、人々の都市への移住や、教育・健康レベルの向上、政府による反宗教政策、行政の構造化などに起因するという。さらに、ポスト・ソヴィエト時代に移行してからは自由主義経済によって多数の葬儀サービスが出現するなどの変化を見せている。ソヴィエト連邦崩壊以来、ほぼ四半世紀が経ち、変化の要因を検討する必要がある(22)。また、ディスカッションでは、「記念的な言説 (мемориальный дискурс)」すなわち、記念的な場所の機能と、それら特定の景観と結びついた物語の出現に注目が集まったと報告されている(23)。

発表内容に注目すると、「現代ロシアの葬儀と若者」や「ソ連時代にシベリアのシャーマンの葬儀がどのように変化したか」など、葬儀に関する具体的な事例が発表されている(24)。参加者の中に、後に『死の考古学』に論文を掲載している研究者の名前を確認することができ(25)、会議で注目された「記念的な言説」が、雑誌第3巻のテーマとなっている「自然発生的な追悼」と関連する内容であることから、この会議が『死の考古学』へと繋がる基盤となったことが推測される。『死の考古学』がロシア初の死生学雑誌と主張されていることも踏まえると、この会議がロシアで「死生学」として意識された学術的動向の原点であったと言えるだろう。

### 3. なぜ近年のロシアで「死生学」が必要とされるのか

以上、ロシアにおける「死生学」は、ごく近年、歴史学や人類学、社会学の研究者を中心に開始されたことが分かったが、なぜ近年のロシアで「死生学」という形での学際的な研究が必要となったのであろうか。これまで概観した中では、ロシアには西欧のように、死を専門に扱う研究所や学術雑誌が無く、研究が限られている事が理由として挙げられていた。また、人類学や社会学の分野では、社会の変化に伴い、葬儀や死の語られ方にも影響があったため、再検討する必要性が出てきたことなどが判明した。より詳しい背景を理解するため、『死の考古学』に掲載されている論文、および、編集者であるモハフヤソコロワのインタビュー記事から解明を試みたい。

#### 3-1 『死の考古学』の中で語られる死生学の必要性

『死の考古学』第1巻に、「私達が沈黙していること...なぜ現代ロシアで死生学が普及していないのか？」というタイトルの論文が掲載されている(26)。著者は、ロシア国立人文大学のS・エレミーワ(27)である。この論文では、ロシアで近年起こった事件が紹介されており、その事件を例として、ロシアで死が語られない理由を指摘する内容となっている。

論文の冒頭に、2014-15年に発生した事件について言及されている。その内の一つは、2014年に起こったパラシュート隊員2名の葬儀に関するもので、ウクライナ東部の軍事作戦中に死亡したとみられるが、死因や死亡時の状況は公開されておらず、葬儀も秘密裏に執り行われた。独立系の新聞『プスコフ州 (Псковская губерния)』が、隊員の墓の写真を報じたが、隊員の墓だと特定されるようなネームプレートや花輪は間もなく撤去され、新聞関係者が何者かに襲撃され重傷を負うという事件が起こった。翌年2015年には、ウクライナ東部、ドンバス地方でロシアの特殊任務部隊3名が捕虜となり死亡するという新たな事件も起こったが、本格的な調査が始まって間もなく、大

統領令が発令され、議論は禁止されてしまった<sup>(28)</sup>。

一連の事件を受けて、エレミーワは、当局による命令の遂行中に起こった「死」は、個人の人格のない「死」となると指摘している<sup>(29)</sup>。そして、人格のない「死」はソ連時代に形成されたという。1917年の革命を経て、個人の死は全て国家が管理する時代となり、エレミーワによれば、「ソ連には、性別も死も存在しておらず、それらは個人に属するものではなく、国家に属していた」という。1918年には、法令によって墓地や葬式も全て国家の管理下に置かれるようになった。レーニンの死後には、レーニンを英雄として崇拜する神話が生み出され、その対極をなすものとして、名もなき人々の死は集合的に扱われるようになった。さらに、その後の恐怖政治によって、死について語る機会は完全に失われてしまったという<sup>(30)</sup>。

前述の事件報道で扱われていたような当局に関連した「死」に限らず、ロシアには「死」全般に関して公に語りにくい風潮があるというが、ここ数年のロシアに、死を語る権利のために闘う人々が現れてきたという。ロシアにおけるホスピス運動の中心人物であるV・ミリオンシコワ<sup>(31)</sup>と娘のN・フェデルメッセル<sup>(32)</sup>、ブロガーで社会活動家のA・ブスロフ<sup>(33)</sup>などの人物である。ブスロフは、自らの闘病の様子をブログ等で公表し、インターネットで治療費を集めるなどの活動を行った<sup>(34)</sup>。

エレミーワは、これらの事例を受けて、「死に関する議論の必要性は明らかであり、本格的な死生学の研究が望まれる。しかし、その発展は、社会的な要請だけでなく、社会を構成する個々人の成熟度や、ソ連時代に死の全面的な統制を行っていた当局の圧力にも左右される」と締めくくっている<sup>(35)</sup>。

当該論文では、ロシアで死生学が必要とされる背景として、「死」を公に語ることが困難な社会的状況が紹介されており、その原因はソ連時代に遡ること、そして現在は、インターネットの普及などにより、死を公に語る試みはあるものの、さらなる議論の必要性が主張されていた。

### 3-2 編集者によって語られる死生学の必要性

続いて、モハフとソコロワのインタビュー記事からも、死生学プロジェクト立ち上げに至った動機を確認していきたい。両者に共通しているのは、ロシアでは、死を語る方法がソヴィエト時代を通じて完全に失われてしまったという主張である。現在でも死を語ることや研究対象とすることを避ける根強い風潮があるという。具体例として、ソコロワが、幼少期に母親に死について質問をしたところ、考えてはいけないと言われたことや、大学時代に、死をテーマとした論説を書きたいと相談したところ、止められたという経験談が語られている。その原因として、ソヴィエトの体制下で、都市への移住などの人の流動化や戦争等による多大な犠牲により、祖父母や両親が行ってきた伝統が継承されておらず、死に際しての実践や語り方が分からない状況があると述べられている。さらに、ソヴィエトの文化は死を避ける文化であり、若さと不滅の文化であったこと等も原因として挙げられている<sup>(36)</sup>。

現在はインターネットの普及もあり、終末期を迎えた患者が自らの闘病の様子を数年にわたり公開するなど、公に語る試みもあるが、この事例に対し「15年前では考えられなかったことが起きている」と述べられており、この言葉もロシアで死を語ることの困難さを物語っていると思われる。結論として、まずは死を公に語る必要性があること、死を語るには過去を振り返る必要があると結んでいる<sup>(37)</sup>。

モハフやソコロフの主張も、『死の考古学』でエレミーワが主張していた内容と類似している。ロシアにおける「死生学」の推進者は、死をタブー視する風潮がある中で、「死を公に語る」ことを課題とみなしており、ソヴィエト時代を含めた過去を振り返ることの重要性と、死に関する議論を促進させる必要性を主張していた。

#### 4. 『死の考古学』構成と内容

それでは、「死の議論を活発化させる」という意図の下で作成された雑誌はどのような構成になっているのだろうか。各巻の具体的な構成と内容に注目する。

##### 4-1 現代ロシアの葬儀・墓地

第1巻は、ロシアで死生学が必要となった背景を説明する論文と、葬儀と墓地に関する研究事例から構成されている。3-1で紹介したエレミーワの論文も、この巻に掲載されている。

2015年 第1巻 目次<sup>(38)</sup> (※以下、各論文の標題は筆者による和訳。第2巻以降も同様)

1. 【インタビューとディスカッション】死生学と西洋の人類学
2. 私達が沈黙していること...なぜ現代ロシアで死生学が普及していないのか?
3. ウラジーミル地方・セリバノフスキー地区の葬儀
4. アルバニア人の葬儀における告白：民族、地域の境界線
5. ペット墓地：地域の選択
6. 名も無き人々が凍った大地に眠っている：強制労働収容所における葬儀と遺体
7. 記念碑に関する「追加情報」：キムルとドゥブナの都市墓地における墓標デザインの分析
8. 奇跡の土地：ギャングの墓と資本をめぐる闘争
9. オットー・ディックスの目を通しての戦争と死

3から8の論文は、全てロシア人の研究者による、墓地と葬儀に関する研究報告となっている。著者の専門は、人類学、言語学、歴史学、社会学や政治学と様々であり、所属も大学に限らず、都市開発コンサルティング会社や本屋に所属している人物など多様である<sup>(39)</sup>。

基本的にはロシア国内の内容だが、4の論文のようにバルカン半島の研究者による国外の墓地を対象とする論文も含まれている<sup>(40)</sup>。5の論文は90年代頃から現れたペット墓地に関する内容であり<sup>(41)</sup>、8の論文は、ソ連崩壊後の犯罪グループ集団の墓に関する研究など<sup>(42)</sup>、地域毎、時代ごとに墓地に現れた特徴を紹介する内容となっていた。

中でも、雑誌の編集長であるモハフの論文の内容に注目したい。「名も無き人々が凍った大地に眠っている：強制労働収容所における葬儀と遺体」では、1920年代に設立され、その後40年近く続いた強制労働収容所で、囚人が亡くなった際に、どのように遺体が扱われていたかが詳しく述べられている。強制労働収容所では、囚人が亡くなると、衣服を脱がされ、土を掘って埋葬される。埋葬後は、名前を示すプレートなどはなく、番号が書かれた簡単な目印が立てられたのみだったという<sup>(43)</sup>。論文から、収容所で個人の死が尊厳なく扱われていた様子を伺い知ることができる。

#### 4-2 ソ連における死

第2巻の全体のテーマは「ソ連における死」である。冒頭の論文は、アメリカの歴史学者で、レーニン崇拝に関する著作を持つN・トゥマルキン<sup>(44)</sup>と、雑誌編集長モハフとの対談形式となっており、ソヴィエトの政治文化の中で「死」が果たした役割が述べられている<sup>(45)</sup>。続く2の論文では、ボリシェヴィキ政権によって、「新しい人間」像が描かれ、死の言説（дискурс смерти）が喜びの言説（дискурс радости）へと変えられたことや、火葬が推進されたことなどが紹介されている<sup>(46)</sup>。

##### 2016年 第2巻 目次<sup>(47)</sup>

1. 【インタビュー】レーニン崇拝とソヴィエトの死の文化
2. 赤いタナトス：ソヴィエト文化の死の象徴
3. ソ連時代の自殺：電子コーパス・個人の日記“Prozhito”を題材に
4. ソヴィエト映画のポスターにおける死のイメージ
5. 「ネズメヤナ」作品におけるアフガニスタンのテーマ
6. 【インタビュー】本「ねじ曲がった悲しみ：未埋葬の記憶」
7. 小都市の社会秩序における死亡記事の存在
8. 【翻訳】悲しみと怒りの狩人（フィリピン・ルソン島における悲嘆を和らげる行為について）
9. 【翻訳】他者の死に方：死の人類学への見解
10. 【文献紹介】21世紀の死の人類学：文献レビュー

3から5、および7の論文は、歴史学・社会学・言語学を専門とするロシアの研究者によるもので、ソ連時代の人々の日記や、映画のポスター、アーティストの歌詞、死亡記事の内容などから、「死」が日常生活でどのように語られ、表現されていたか、具体的な実態を紹介する内容となっている<sup>(48)</sup>。

6は、「ねじ曲がった悲しみ：未埋葬の記憶」の著者であるヨーロッパ大学（フィレンツェ）の文化史家へのインタビューである。著作は、ソ連時代後期からポスト・ソヴィエト時代に現れた死者への記念的な実践に関する内容であり、この現象は、スターリン時代の犠牲者に対し、十分な記念や遺族への補償が為されなかった記憶が未消化なまま現在に至っていることに起因するという<sup>(49)</sup>。

第2巻の執筆者は、半数がロシアの研究者だが、他はアメリカやヨーロッパの歴史学者とのインタビューや国外の論文の翻訳という構成となっている<sup>(50)</sup>。第1巻と比較すると、墓地や葬儀などの人類学・民族誌的な研究はロシア国内でも充実しているのに対し、ソ連の政治文化と死に関する歴史学的な研究は、アメリカや西欧の研究者が牽引していると言えるかもしれない<sup>(51)</sup>。

#### 4-3 自然発生的な追悼

第3巻のテーマは、「自然発生的な追悼（Спонтанная мемориализация）」である。編集部からのメッセージに、この用語の説明がなされている。80年代以降、事故や事件の発生後に、死者を追悼するための様々な行動が自然発生的に現れる現象が世界的に顕著となり、1997年のダイアナ妃の事故や、2001年9月11日に発生した米・同時多発テロの際に生じた「自然発生的な追悼」が例として挙げられている。ロシアでも近年、飛行機事故や政治家の暗殺事件後に、「自然発生的

な追悼」が行われており、その特徴として、①街の通りや建物等の日常的な空間に現れること、②メディアによって迅速に拡散されることで、多くの人が参加すること等が挙げられている<sup>(52)</sup>。

2016年 第3巻 目次<sup>(53)</sup>

1. 【インタビュー】 ジャック・サンティエーノへのインタビュー
2. 【質問と回答】 自然発生的な追悼に関する専門家への7つの質問
3. 詩を記憶する：記念的な素朴な詩
4. ネムツォフ橋：公共空間における記念式典
5. グリディン墓地：カレリア地方の聖なる土地に現れたオブジェクトとして
6. ネクロユートピア：剥き出しの生とソ連に属さない主体<sup>(54)</sup>
7. 【翻訳】 自然発生的な追悼：暴力的な死と初期の喪の儀式
8. 【翻訳】 公認されない悲嘆：晩年期の喪失
9. 【翻訳】 公認されない悲嘆への理解を深める
10. 【書評】 バーチャルな来世：21世紀における死の悲しみ
11. 【書評】 消費文化における死

最初の2つの論文では、ソコロワが、「自然発生的な追悼」という社会現象について、主にアメリカの研究者にインタビューを行い、回答を得る形式となっている（現代における「自然発生的な追悼」の機能は何かなど）<sup>(55)</sup>。「自然発生的な追悼」は、悲嘆（Grief）とも関わってくるため、7から9はアメリカで発行されている *Omega journal* や *The Hospice Foundation of America* に掲載された悲嘆に関する論文をロシア語に翻訳した内容となっている<sup>(56)</sup>。

3と4の論文はロシアにおける近年の「自然発生的な追悼」の事例を扱っている。4の「ネムツォフ橋：公共空間における記念式典」は、2015年にモスクワの中心地にある橋で発生した政治家のボリス・ネムツォフ（Б. Е. Немцов）の銃撃事件後、モスクワ市民によって発生現場にすぐに花が運び込まれ巨大な記念碑が現れたという内容である<sup>(57)</sup>。第3巻は、ロシアで近年現れたこのような事例に注目し、現象を解明するために、主にロシア国外の専門家に意見を求め、翻訳や書評によってロシアへと見解を紹介する構成となっていた。

4-4 大衆文化における死

第4巻の全体のテーマは、「大衆文化における死」である。編集部からのコメントの冒頭には、ロシアに死の社会学に関連する強力な学術的な教育機関が無いにもかかわらず寄稿してくれた著者らに対する感謝が述べられている。そして、イギリスの人類学者 G・ゴーラーの用語「死のポルノグラフィ」を引用し、現代社会において死がタブーとされ、公共の空間から撤去されているというテーマに対して、この巻は反駁を試みると表明している。死は、映画やゲーム、広告など、我々の近くにあり、タブーではないことを示すという<sup>(58)</sup>。

2017年 第4巻 目次<sup>(59)</sup>

1. 【インタビュー】 死の崇拝、吸血鬼、ゾンビ、トランスヒューマニズムについて

2. 【インタビュー】「死があるとき、私たちはもういない」デス・メタル：民族誌研究の試み
3. ソ連における死、またはある不滅の結果
4. クラフトビール醸造における死のイメージ
5. ゾンビを救助する：ゾンビ研究にゾンビを返す
6. 死は魔法ではない：アニメ・ポニーシリーズはどのように死を変換して放送したか
7. 【翻訳】ディズニー映画の死：子どもが死を理解することへの影響
8. 【翻訳】有名な死者と性的死者：大衆文化、法医学検査、死者の反乱
9. 【翻訳】死体、大衆文化、科学的司法鑑定：死に対する一般の強迫観念
10. 【書評】古典映画と現代映画における死：Fade to Black
11. 【書評】アメリカのゾンビ映画における現代のレトリック

内容に注目すると、ロシアの研究者による論文は投稿されているものの、その題材はロシアの作品ではなく、アメリカの映画などをテーマとして扱っている。近年、ゾンビや吸血鬼を扱った映画が人気を集めていることに注目し、分析を行っている。また、テレビドラマやアニメで死がどのように描かれ、人々にどのような影響を与えているのかという研究が紹介されている<sup>(60)</sup>。

特徴として、アメリカやヨーロッパの死生学雑誌からの翻訳や書評が半数を占め、世界的に普及している作品を対象としていた。ポスト・ソヴィエト以降、ロシア発の大衆文化における「死」を扱った研究については、今後の展開が待たれるように見受けられた。

#### 4-5 火葬

第5巻で「火葬」がテーマとなっている理由について、編集部からのコメントに次のように述べられている。現在、アメリカやヨーロッパで火葬を選択する人々の割合が増えており、2030年には死者の大部分が火葬されるとの予測があるという。火葬によって、葬儀や埋葬にかかる費用が下がり、墓地に縛られなくなるため、葬儀業界の構造が大きく変わるとの見解があり、編集部は、世界的な潮流として火葬が増加していること、土葬から火葬に変化することによって起きる影響に注目するために、第5巻のテーマを「火葬」としたと述べている<sup>(61)</sup>。

#### 2017年 第5巻 目次<sup>(62)</sup>

1. 【インタビュー】「死の否定を覆す」
2. 「棺は避けられない…」グビータ・バルテリの火葬について：エンジニアと衛生士
3. 「私はこれらの問題が気に入らない」：ロシアのインターネット読者の火葬に関する声明
4. 機械の分解：専門家の文脈における火葬
5. 「ロマンスから機能へ」火葬のための建築：モスクワ初・火葬場のためのコンテスト
6. 北欧の近代墓地：主な研究の概要
7. 「灰と擬態」死の分野の演劇評論
8. 【翻訳】墓地の墓の影で
9. 【翻訳】「風に吹かれて？」アイデンティティと物質性、人間の灰の行先
10. 【翻訳】新たな方法での火葬：火葬の発展とイギリスの葬儀における音楽への影響



## 11. 【書評】「塵から灰まで」火葬と英国の死の方法

最初の論文は、シカゴ大学の人類学者シャノン・リー・ドーディ（Shannon Lee Dawdy）へのインタビューとなっており、アメリカの火葬率が 2000 年から 2015 年の間に、25%から 60%に上昇したことを受けて、その理由や変化について見解を示している<sup>(63)</sup>。2、5 の論文では、ソ連時代当初に火葬を普及させるために尽力した技術者の手記や<sup>(64)</sup>、モスクワで初めてとなる火葬施設建設に伴う設計コンテストなどが紹介されており<sup>(65)</sup>、ソ連政府がどのように「火葬」を推進したかが分かる内容となっている。3 の論文では、現代のロシアにおいて、インターネットでアンケート調査をしたところ、火葬に肯定的な意見も多いという結果が紹介されている<sup>(66)</sup>。雑誌の後半では、火葬率の高いイギリスの事例を主に紹介する構成となっていた<sup>(67)</sup>。

現在のロシアの火葬についてはほぼ触れられていないが、編集者はアメリカ・西欧の火葬率の増加に大きな関心を寄せており、今後、ロシアでも増加するとみられる火葬について、他国の事例を学び、参考にするとといった姿勢が見えた。

### 4-6 『死の考古学』まとめ

以上、全体を概観すると、編集者は、第1巻ではロシアで研究が蓄積されている人類学・民俗学における死の特集を、第2巻ではロシアで死を語る上で避けて通れないソ連と死を、そして第3巻以降は、編集者の注目する社会的現象をテーマとして選んでいたと言えるだろう。

ロシアの死生学の特徴として、2・2で紹介したモハフとカンの対談の中で挙げられていたように、ロシアの研究者による墓地や葬儀に関する研究は豊富であった。また、ソ連時代の死に関する研究は、ロシア国内外の研究者によって、歴史学・人類学的な研究が行われている。ボリシェヴィキ政権が打ち出した新しい人間像と死に対する言説は、レーニン崇拜や強制労働収容所での死の扱われ方、また推進された火葬などを対象に研究が進められていた。第3巻以降で取り上げられていた、「自然発生的な追悼」、「大衆文化における死」、「火葬」は、ロシア社会で現在、注目を集めるテーマであり、それらの現象を解明するために、アメリカやヨーロッパの専門家に意見を求める形が多く見られた。

一方で、通常「死生学」といえば必ず取り上げられるような緩和ケアなどの死に向かうプロセスに焦点を当てた研究や、心理学的なテーマは、ほぼ含まれていない点も特徴であると言えるだろう<sup>(68)</sup>。

## 5. おわりに

ロシアの「死生学」は、近年立ち上げられたばかりであり、その内容は、プロジェクトの創始者であるモハフやソコロワの専門とする歴史学や人類学、社会学を中心に構成されていた。さらに、ロシアにおいて死生学は、「死の議論を活発化させること」を目的としており、その背景には、死をタブー視し、避ける社会的状況があることも明らかになった。今後も「死の研究室」が注目し、取り上げる内容を追うことは、ロシア社会を知る一つの切り口となると思われる。

註

- (1) リュドミラ・サーキャン「ロシア初『死の研究室』がオープン：テクノロジーがもたらす死生観の変化」, 2017年10月11日付, 日本スプートニク, <https://jp.sputniknews.com/opinion/201710114174647/> (最終閲覧 2019年3月28日)。また, 次のような記事からもロシアの「死生学」に関連した情報を得られる。ゲオルギー・マナエフ「ロシア人は死とどう向き合っているか」, 2018年7月23日付, Russia Beyond, <https://jp.rbth.com/lifestyle/80577-roshia-jin-wa-shi-to-dou-mukiatteiru-ka> (最終閲覧 2019年3月28日)
- (2) 死の研究室 (Лаборатория социальных исследований смерти и умирания) : 直訳すると, 「死と死にゆくことの社会的研究室」となる。サンクトペテルブルク・独立社会学調査センター (註3) の独立プロジェクトとして, 2017年に開設された。研究室が対象とするテーマは, 儀式サービス市場の機能, 葬送儀礼の変化, 歴史的・人類学的な死, ホスピス運動, 悲嘆の理論, 死と新しい技術, 不滅性, 生命倫理と医療の人類学など。 <https://cistr.pro/platform/laboratoriya-sotsialnyh-issledovany-smerti-i-umiraniya/> (最終閲覧 2018年12月31日)
- (3) サンクトペテルブルク・独立社会学研究センター (Центр независимых социологических исследований, ЦНСИ) : 1980年代後半に, ソ連科学アカデミー社会学研究所 (Института социологии АН СССР) レニングラード支部のメンバーの発案により創設された。現在, 22名の社会学者が在籍 (10名は博士), 毎年30の研究プロジェクトが進行。ナショナリズム, 都市研究, ジェンダー研究など。2009年より, 雑誌Laboratoriumを発行。 <https://cistr.pro/about/> (最終閲覧 2018年12月31日)
- (4) 『死の考古学』: Археология русской смерти. Том 1 - 5, 2015 - 2017. ISSN 2414-9365. <http://deathanddying.ru/#about> (最終閲覧 2019年1月5日)。雑誌は左記の専用のウェブサイトの他, ロシアのSNSであるVKに登録されている『死の考古学』のページからも入手できる。 [https://vk.com/wall-41038889\\_2162?fbclid=IwAR0EqvUFhqpA7\\_au6qb2sGsXSg2DmFjOvNAeOH8424pl86dcpMOW249ruSI](https://vk.com/wall-41038889_2162?fbclid=IwAR0EqvUFhqpA7_au6qb2sGsXSg2DmFjOvNAeOH8424pl86dcpMOW249ruSI) (最終閲覧 2019年3月29日)
- (5) セルゲイ・モホフ (Сергей Мохов) : イギリス・マンチェスター大学, 歴史学修士 (public history)。ロシア国立研究大学高等経済学院 (НИУ ВШЭ: National Research University Higher School of Economics) 大学院生。研究テーマは葬送産業と社会秩序。 <https://cistr.pro/team/sergey-mokhov/> (最終閲覧 2019年1月10日)
- (6) アンナ・ソコロワ (Анна Соколова) : ロシア科学アカデミー人類学民族学研究所 (Института Этнологии и антропологии РАН) 研究員 (モスクワ)。研究テーマは20 - 21世紀におけるロシア人の葬儀の変容。現在は葬儀の変容を通してロシアの「新しい人間 (новый человек)」像を明らかにしようとしている。 <https://cistr.pro/team/anna-sokolova/> (最終閲覧 2019年1月5日)
- (7) 「死の研究室」ホームページ (註2参照)。
- (8) 「死の研究室」ホームページ (註2参照)。
- (9) 雑誌編集メンバーは, ①セルゲイ・カン (Sergei Kan) : 米・ダートマス大学教授, 人類学, ネイティブ・アメリカン研究, ②ミハイル・アレクセーフスキー (Михаил Алексеевский) : КБ

- Стрелка (モスクワにある都市開発コンサルティング会社) 所属, 都市人類学センター長, ③デニス・エルモリン (Денис Ермолин), ピョートル大帝記念人類学・民族学博物館所属 (Музей антропологии и этнографии им. Петра Великого (Кунсткамера) Российской академии наук, МАЭ РАН), 歴史学。『死の考古学』ホームページ (註 4 参照)。
- (10) VK (ロシアの SNS) の『死の考古学』(Археология русской смерти: death studies journal) のページによると, 2019 年 2 月 13 日に第 6 巻が発売されている。オンラインでの無料公開は現時点では行われていない (2019 年 3 月 29 日時点)。<https://vk.com/necrosociology> (最終閲覧 2019 年 3 月 29 日)
  - (11) これらの情報は, 筆者が編集長 S・モハフにメールにて問い合わせ, 回答として得たものである (2018 年 11 月 10 日, 19 日の 2 回)。
  - (12) 各巻ごとの個別テーマは, 第 2 巻以降定められている。第 1 巻には個別テーマがなかったため, 括弧内に筆者が雑誌で扱われている主な内容を記載した。
  - (13) Археология русской смерти. №1. 2018. (Том 6). Тема номера: Смерть и технологии.
  - (14) Сергей・カン (Sergei Kan) : 註 9 参照。
  - (15) 『死の考古学』では, 「死生学」に当たる言葉として, “death studies” がロシア語に訳されずに英語のまま使われている。Кан С., Мохов С. Интервью-дискуссия: Death studies и западная антропология // Археология русской смерти. №1. 2015. (Том 1). С. 15.
  - (16) Там же. С. 13-30.
  - (17) ロシア科学アカデミー人類学民族学研究所 (Институт антропологии и этнографии им. Н.Н.Миклухо-Маклая)
  - (18) Ермолин Д. Конференция «Танатологические практики и нарративы в современной культуре: советский и постсоветский период» // Антропологический форум. №22. 2014. С. 339.
  - (19) Там же. С. 339.
  - (20) Там же. С. 339-340.
  - (21) Денис・エルモリン (Денис Ермолин) : 註 9 参照。
  - (22) Там же. С. 340.
  - (23) Там же. С. 347.
  - (24) Там же. С. 340-346.
  - (25) 『死の考古学』の編集委員である S・モハフや M・アレクセーフスキーの他, 第 3 巻に寄稿している D・グロモフ (Д. Громов) の名前を確認できた。
  - (26) Еремеева С. То, о чем молчим...Почему death studies не популярны в современной России? // Археология русской смерти. №1. 2015. (Том 1). С. 31-50.
  - (27) スヴェトラナ・エレミーワ (Светлана Еремеева) : ロシア国立人文大学 (РГГУ), 社会文化研究科 (ОСКИ), 歴史文化理論学科准教授。研究テーマは, 記憶研究 (memory studies), 記念的实践 (коммеморативные практики), 死生学 (death studies)。Там же. С. 31.
  - (28) Там же. С. 36-37.
  - (29) Там же. С. 37.

- (30) Там же. С. 45-47.
- (31) ヴェラ・ミリオンシコワ (Вера Миллионщикова, 1943-2010) : ソ連・ロシアの医師。モスクワ初のホスピスの創始者。産婦人科医, 麻酔科医として勤務したのち, 腫瘍医としてモスクワのレントゲン研究所で働いた経験から, 終末期医療に関心を持ち続け, 1994 年にモスクワ初のホスピスの責任者に就任した。Вера Васильевна Миллионщикова. Благотворительному фонду помощи хосписам «Вера». <http://www.hospicefund.ru/hospice/vera/> (最終閲覧 2019 年 1 月 11 日)
- (32) ニュータ・フェデルメッセル (Нюта Федермессер) : ミリオンシコワ (註 31) の娘で, 2006 年にホスピスを支援するためのチャリティー基金 “Vera” を設立した。“Vera” は, ヴェラ・ミリオンシコワにちなんで名付けられた。基金はロシア各地のホスピスの支援に役立てられている。Фонд. Благотворительному фонду помощи хосписам «Вера». <http://www.hospicefund.ru/fund/> (最終閲覧 2019 年 1 月 11 日)
- (33) アントン・ブスロフ (Антон Буслов, 1983-2014) : ロシア出身のジャーナリスト。2011 年に悪性リンパ腫と診断された。ブログで積極的に情報発信を行い, インターネットを通じて治療資金を募集した。多くの募金が集まりニューヨークでの治療が実現したが, 2014 年にその生涯を閉じた。ブスロフのブログ名は, «Экспериментальный подвал под напряжением» (和訳: 緊迫した状況下の実験的地下室)。<https://wayback.archive-it.org/all/20170905202853/https://mymaster.livejournal.com/> (最終閲覧 2019 年 1 月 11 日)
- (34) Еремеева С. То, о чем молчим...Почему death studies не популярны в современной России? // *Археология русской смерти*. №1. 2015. (Том 1). С. 48.
- (35) Там же. С. 49.
- (36) «Анна Соколова, о том, как разговаривать о смерти». The Village. <https://www.the-village.ru/village/people/city-news/311037-anna-sokolova> (最終閲覧 2019 年 1 月 11 日), および Айвазян А. Похоронная антропология: как меняется отношение к смерти в России. 2015/10/26. Афиша Daily. <https://daily.afisha.ru/archive/gorod/people/pohoronnaya-antropologiya-kak-menyaetsya-otnoshenie-k-smerti-v-rossii/> (最終閲覧 2019 年 1 月 11 日)
- (37) «Анна Соколова, о том, как разговаривать о смерти». The Village. <https://www.the-village.ru/village/people/city-news/311037-anna-sokolova> (最終閲覧 2019 年 1 月 11 日)
- (38) オンラインで公開されている内容においては, 第 1 巻の目次のページは省略されているため, ここでは各論文の標題を順番に並べた。第 2 巻と第 3 巻も同様。Археология русской смерти. №1. 2015. (Том 1). С. 11-211.
- (39) Там же. С. 10-210.
- (40) Ермолин Д. Границы конфессионального, этнического и регионального в погребальном обряде албанцев // *Археология русской смерти*. №1. 2015. (Том 1). С. 100-120.
- (41) Сафронов Е. Кладбище домашних животных: локальный вариант // *Археология русской смерти*, №1, 2015. (Том 1). С. 122-146.
- (42) Гречко А., Рохлиц М. «Поле чудес»: бандитские могилы и борьба за капитал //

- Археология русской смерти. №1. 2015. (Том 1). С. 194-208.
- (43) *Мохов С.* «Вот и еще один безымянный лег в мерзлую землю»: похороны и телесность в ГУЛАГе. Археология русской смерти. №1. 2015. (Том 1). С. 148-166.
- (44) ニーナ・トゥマルキン (Нина Тумаркин) : Wellesley College (米・マサチューセッツ) 歴史学教授。The Davis Center for Russian and Eurasian Studies 研究員。Тумаркин Н., Мохов С. Интервью с Ниной Тумаркин о культе Ленина и советской культуре смерти // Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). С. 13.
- (45) Там же. С. 12-21.
- (46) *Мальшева С.* Красный Танатос : некротизм советской культуры // Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). С. 23-46.
- (47) Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). Тема номера: Смерть в СССР. С. 12-247.
- (48) *Мельниченко М.* Самоубийства советского времени по материалам электронного корпуса личных дневников «Прожито» // Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). С. 50-81. *Котомина А.* Образ смерти в советских киноплакатах // Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). С. 84-116. *Простаков С.* Афганская тема в творчестве группы «Несмеяна» // Археология русской смерти. №1, 2016. (Том 2). С. 117-134. *Онишко К.* Бытование некролога в социальном порядке небольшого города // Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). С. 156-174.
- (49) *Эткинд А.* Интервью о книге «Кривое горе: память о непогребенных» // Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). С. 137-145.
- (50) Археология русской смерти. №1. 2016. (Том 2). С. 12-247.
- (51) 『死の考古学』第1巻, 「死生学と西洋の人類学」において、ソ連と死に関する先行研究として、イギリス・アメリカの歴史学者による次のような文献が挙げられている。Catherine Merridale, *Night of Stone: Death and Memory in 20th Century Russia*, Viking Adult, 2001. Catherine Merridale, *Ivan's War: Life and Death in the Red Army, 1939-1945*, Picador, 2006. Nina Tumarkin, *Lenin Lives: the Lenin Cult in Soviet Russia*, Harvard University Press, 1983. Nina Tumarkin, *The Living and the Death: the Rise and Fall of the Cult of World War II in Russia*, BasicBooks, 1994. Кан., Мохов. Интервью-дискуссия : Death studies и западная антропология // Археология русской смерти. №1. 2015. (Том 1). С. 29-30.
- (52) От редакции // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 4-6.
- (53) Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). Тема номера: Спонтанная мемориализация. С. 7-162.
- (54) この論文では、ソヴィエト時代後期(1970年代後半 - 1980年代)に、一部のアーティストや知識人の間で展開されていた非公式な運動について取り上げられている。彼らの運動の特徴は、ソ連の政治システムに賛成も反対もせず、政治的な関心を一切持つことなく、「普通のソヴィエト市民」と自身の違いを主張した点にあった。当該論文では、これらの運動をジョルジョ・アガンベン (Giorgio Agamben) の用語「剥き出しの生」と結びつけて、分析を行っている

- る。Юрчак А. Некроутопия: политика голой жизни вне-советский субъект // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 80-112.
- (55) Сантино Д., Соколова А. Интервью с Джеком Сантино, автором книги *Spontaneous Shrines and the Public Memorializations of Death* // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 7-18. Досс Э., Маргри П., Гридлер С., Канн К., Соколова А. Рубрика «Вопрос – ответ» // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 19-38.
- (56) Ханней А., Леймер К., Лоури Д. Спонтанная мемориализация: насильственная смерть и нарождающийся траурный ритуал / Пер. Анны Соколовой // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 113-124. Дока К. Бесправное горе: утрата в позднем возрасте / Пер. Александры Котловой // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 124-131. Корр Ч. Углубляя понятие бесправного горя / Пер. Дарьи Дубовки // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 132-146.
- (57) Громов Д. Немцов мост: поминальные практики в публичном пространстве // Археология русской смерти. №2. 2016. (Том 3). С. 52-66.
- (58) От редакции // Археология русской смерти №.1. 2017. (Том 4). С. 5-6.
- (59) Археология русской смерти №.1. 2017. (Том 4). Тема номера: Смерть в популярной культуре. С. 3. (Содержание)
- (60) Археология русской смерти №.1. 2017. (Том 4). С. 7-192.
- (61) От редакции // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 5-7.
- (62) Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). Тема номера: Кремация. С. 3. (Содержание)
- (63) Дауди Ш., Горбун Г. Дать отрицанию смерти обратный ход... // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 6-23.
- (64) Соколова А. «Гроб неизбежен...» Гвидо Бартель о кремации: инженер и гигиенист // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 24-59.
- (65) Селиванова А. От романтики к функции. Архитектура для «огненных похорон»: конкурс на первый московский крематорий. // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 101-113.
- (66) Рогозин Д. «Эти вопросы мне не нравятся...»: высказывания русскоязычной интернет-аудитории о кремации. // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С.60-75.
- (67) Келлахер Л., Пендергаст Д., Хоки Д. В тени кладбищенской могилы. / Пер. Анны Козыревской под ред. Ивана Куликова // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 136-163. Пендергаст Д., Хаки Д., Келлахер Л. В дуновении ли ветра? Идентичность, материальность и судьбы человеческого праха. / Пер. Колошенко Юлии и Перегудова Дмитрия под ред. Ивана Куликова // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 164-195. Парсонс Б. Кремация на новый лад: развитие кремации и ее влияние на музыкальную составляющую похоронной обрядности Англии 1874–2010 годов. / Пер. Даниила Поспелова // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 196-223. Джапп П. От пыли до праха. Кремация и британский образ смерти. / Обзор

Анны Мезенцевой // Археология русской смерти №.2. 2017. (Том 5). С. 224-245.

- (68) 編集長 S・モハフに問い合わせたところ、ロシアの死生学においては、終末期医療など死をめぐる様々な問題を抱える医療現場への実践的な関与は現時点では行なわれていないとのことであったが、ワークショップを計画するなど、準備段階であるとの回答を得た(2018年11月19日)。ロシアにおける終末期医療について補足するために、ホスピスの歴史と現状について言及しておく。ロシアには、各地に98のホスピスがあるが(2014年時点)、人口比では足りておらず、さらに500のホスピスが必要だとされる。ロシアで最初のホスピスは、V・ゾルザ(Victor Zorza)というイギリスのジャーナリストの貢献により、1990年、サンクトペテルブルクに誕生した。ゾルザはポーランド生まれのユダヤ人で、1941年、ナチスの侵攻によってロシアへ逃れ、さらにイギリスへ渡ったという経歴を持つ。1977年に娘をイギリスのホスピスで亡くしている。亡くなる直前の8日間だけの入院であったが、そのケアに感銘を受け、ホスピスの普及に関心を寄せるようになった。後、ロシアに取材で訪れた際、終末期患者の悲惨な状況を目の当たりにし、ロシアにホスピスを創設することを決意した。その背景には、かつてロシアへ逃れた際に、地元住民が危険を顧みずに匿ってくれたことに対する恩返しの意味もあったという。ゾルザが取材した当時、ロシアの医療現場には多くの問題があり、病院は専ら根治治療を目的とし、医師たちは緩和ケアに馴染みがなかった。さらに、モルヒネの使用にも中毒性を懸念する声があり、終末期患者に対し、倫理の観点から病状も開示されていなかった。ゾルザは、精神科医のA・グネジロフ(Andrei Vladimirovich Gnezdilov)と協力し、最初のホスピスを開設した後、イギリスから3人の看護師を招いて、関係者に緩和ケアの訓練を実施している。その後、緩和ケアに対する関心は拡がりを見せ、1991年にはモスクワで医師のためのトレーニングコースが実施された。モスクワには、1994年に最初のホスピスが設立され、他の都市にも緩和ケアを提供する施設や病院が増えていった。1995年の段階で、緩和ケアに関する統括的な組織が誕生したことも普及の後押しとなった。緩和ケアに関連する組織として、The Association for Palliative Medicine, The Russian Palliative Care Association は、1995年までに設立され、The Samara Association of Hospice Workers は、2001年に設立されている。現在、ロシアのホスピスの数は不足していると言われているが、ホスピスを支援するためのチャリティー基金を運営している“Vera”という団体が積極的な活動を行っている。“Vera”は、モスクワ初のホスピスの責任者となった医師、V・ミリオンシコワ(註31)にちなんで名付けられた。2006年に娘のN・フェデルメッセル(註32)によって設立され、基金はロシア各地のホスピスの支援に役立てられている。ニュータは、3-1で紹介した『死の考古学』第1巻のエレミーワの論文内でも名が挙げられていたように、積極的な発信を行っている。2018年12月には、プーチン大統領がヤロスラブリを訪問した際に会談し、ホスピスが抱える問題と緩和ケアの重要性について話し合ったと報じられている。以上は、下記文献に基づく。“Hospice charity fund Vera,” p. 5. [http://www.hospicefund.ru/wp-content/uploads/2015/02/In\\_English.pdf](http://www.hospicefund.ru/wp-content/uploads/2015/02/In_English.pdf) (ホスピスチャリティー基金紹介パンフレット, 最終閲覧2019年1月10日) Michael Wright and David Clark, “Hospice care in Russia,” *Progress in Palliative Care*, vol.12(1), Taylor & Francis Informa UK, 2004, pp. 27-29. “Meeting with founder of Vera Hospice Charity Fund Anna Federmesser,”

2018/12/13, Official Internet Resources of the President of Russia, <http://en.kremlin.ru/events/president/news/59398> (最終閲覧 2019 年 1 月 10 日)